

ツルの一声

釧路市動物園 ツル担当主査
吉野 智生



冬のあいだ、給餌場からはタンチョウの声が響きます。よく知られているのはオスが「コー」、メスが「カッカッ」と重ねて鳴く、つがいの間で行われる鳴き交わりですが、他にも警戒する声やつがい相手を呼ぶ声、幼鳥がエサをねだる声など、様々な鳴き方があります。鳥は主に視覚と聴覚を利用して外部を認識する生き物です。タンチョウはダンスなどの行動や鳴き声によってコミュニケーションを取ります。では、この声はどうやって出るのでしょうか。

前回のおさらいになりますが、口を開けると舌があり、舌の付け根に気管の入り口、その後ろに食道が開いています。気管は直径約 1.5 cm のリング状の軟骨（なんこつ）がたくさんつながったもので、弾力があって柔軟です。この細い洗濯ホースみたいな気管が食道と並んで首を走っているわけです。気管は胸腔（きょうくう）内に入ると食道と別れ、最終的に二本の気管支（きかんし）に分かれて左右の肺に到着します。ただしツル類の気管は、肺に着く前に前に一度胸骨（きょうこつ）の竜骨突起（りゅうこつとつき）の中に入ります。胸骨とは聞きなれないかもしれませんが、判りやすく言えば焼き鳥のヤゲンです。

ツル類の気管はこの出っ張った部分に一度入ってからまた出てきて、その後で気管支が分かれます。この二股に分かれる部分に、鳴管（めいかん）と呼ばれる構造があります。細かい造りは鳥の種によって違いますが、鳴管は幾つかの軟骨がくっついた鼓室（こしつ）という共鳴装置、それと



タンチョウの鳴き交わり

何枚かの薄い膜からなり、この薄い膜が振動することで音が出ています。また鳴管には数対の鳴管筋という筋肉があり、膜の緊張を調節しています。なので鳴管筋が発達している鳥ほど、複雑なさえずりができると言われます。

ツル類は単純な声しか出せませんが、首が長いので気管も長く、さらに気管が胸骨竜骨突起の中で複雑にループしているので、金管楽器のように音が増幅されて大きい声ができます。ただしこのループは成長して胸骨が大きくなり、気管が伸びるにつれて発達するので、幼鳥のうちは成鳥のような大きな声は出せず、パイパイという細い声しか出せません。いつ頃声変わりするのかはちょっとはつきりしませんが、1歳を超えるころには幼鳥のような声ではなくなります。タンチョウは行動圏が広く、霧の深い湿原内で過ごすため、大きな声でお互いやり取りをする必要があったのでしょうか。